川端康成文学における「死」の様相
―大正末期から昭和初期の作品を中心に―

王　薇婷

川端初期作品に関する先行研究の多くは、作品個々の性質に即した分析というより、作者の「孤児」としての境遇と、川端文学に大きな影響を与えた「万物一如・輪廻転生」の思想から、初期の「死生観」を理解しようとするものである。すなわち、作品の展開に即した実証的研究とは言い難く、一つ一つの作品に実現された世界の個別性はそこでは捨象されがちであった。この問題点を踏まえた上で、大正末期から昭和初期までの作品を対象にし、「死」のテーマがどのように

表現されているのかを作品自体から検証する。

第一章では、大正13年の「空に動く灯」と大正14年の「青い海黒い海」を対象にして、作品の構造と表現を詳しく検証した上で、川端が大正13、14年に発表した文芸時評を対照しながら、川端作品の思想と技法を明らかにした。

「青い海黒い海」においては、人間の「死」を背景とし、物理的時間と空間を超えて、生と死の境界線を曖昧に暈す世界を構築したことが明らかになった。「水晶幻想」に描かれている「鏡のなかの空間」によって、この世界は一層具象化させられている。一方、「死体紹介人」にも、生と死という対立的な空間を融合することに努力していた川端の、生と死が並存しているという思想が現れている。さらに、物理的時間と空間を超えて、一見何のつながりもない物事が、「円環」で収束するのは、川端作品の特徴とも言えよう。

第二章では、昭和初期の川端作品群に導入された「科学思想」を中心に分析した。なぜこの時期の作品に「科学思想」が取り扱われるかという疑問を踏まえた上で、昭和4～5年の「死体紹介人」と昭和6年の「水晶幻想」を中心に分析した。さらに、昭和7年の「抒情歌」によって、科学思想と「万物一如・輪廻転生」思想の関連性を明らかにした。

「死体紹介人」における火葬場、病院の死亡室や女性死体の描写によって、生と死の対立を融合することに努力していた川端の、生と死の並存を示そうとする思いが表現されている。また、解剖台の上に横たわった死体の描写や、「顕微鏡の種板に個有名詞なんぞありはしないよ」という言葉からは、「人類皆平等」であるという理念が窺われる。一方、「水晶幻想」では、発生学の説と夫人の感情との矛盾が描写されている。それを踏まえた上で、川端は〈子供に自分の血統を継承させる永生の夢〉を持つ人間の歪んだ「生殖」概念を批判している。

さらに、大正末期に、宗教思想をもとに生まれた「万物一如・輪廻転生」思想は、昭和期の科学思想の導入によって、大きな変化が持たされたことも明らかになった。「死体紹介人」においては、解剖と顕微鏡によって、人間社会の二項対立を打破しようとする川端の意図が窺われたのである。「水晶幻想」では、「発生学」を借りて、「万物一如」の思想がより一層具体的に表現されたのである。「抒情歌」では、「魂の力」を電気や磁力になぞらえた上で、霊魂の正体がまだ明らかでないため、その力は「軽々しく肯定出来ないと同じく否定も出来ない」と述べている霊魂上の輪廻転生を定立しようとしたのである。